

視察先別報告 インドネシア

【有償資金協力】

貧困削減地方インフラ開発事業（RISE）

概要

- (1) インフラ施設建設等（交通関連、上水・衛生関連、生産関連、市場関連、保健関連、教育関連）
- (2) コンサルティング・サービス（政策策定・政策評価支援、各種調査、実施監理、設計、施工監理、維持管理支援、モニタリング・評価、参加型開発能力強化等）

1

井上 佳奈子 インドネシアは近年経済成長を遂げており、政府が発表する貧困率は2012年約11.7%と落ち着いているが、地域経済格差が激しいのが現状である。そこでこのプロジェクトはインフラ事業による地域開発と貧困削減を目指してインドネシア州政府とJICAの協力のもと始まった。灌漑事業で作られた田んぼの水路を見学させてもらったが、この事業により作業員である現地の人に収入がもたらされ、収穫が安定し、さらには三毛作ができるようになったというのは驚きだった。もちろん事業そのものは小規模で限定的であるが、コミュニティ内で何が必要か話し合い事業を決定するといった地域に根ざした取り組みは、日本ではあまり見られないように思った。日本が支援しているプロジェクトではあるけれども、日本も学ぶべき側面があると感じた事業の一つであった。

2

貫名 貴洋 このプロジェクト名を最初に聞いた時、ジャワ・バリ地域以外の9州34県237郡という広大な範囲で実施されており、巨大かつ巨額のインフラ整備事業の視察だとイメージしていた。スラウエシ島最南に位置するジェネポント県で実施されている2つの案件を見て、そのイメージは一瞬で消え去った。本プロジェクトの基本は、住民が意見を出し合い、住民から提案された事業案を実現化するものであった。少額規模の事業を実施し、目に見える形で各地の地域住民に直接的な裨益がある。灌漑用水路整備事業では、それまで1年に1回の稲作しかできなかった土地で、農業用水の安定的供給が図られたことでイネ、トウモロコシ、緑豆の三毛作が可能になった。村落給水施設事業では、2km先の水源まで子供達を水汲みに行かせていたが、そのような手合いが不要になり、心置きなく学校に通わせられるようになった。どちらの集落でも、多くの住民から日本の支援に感謝していると聞いた。地域住民のポトムアップによる提案を実現するこのような案件は、今後も要請がある限り実施を続けていき、地域住民、インドネシア国民の自立的な発展を支えていくべきであろう。

3

國司 まゆ 現地の方が作られた灌漑用水路の整備、村落給水設備の建設は、もちろん日本の基準からみるとまだまだ改良の余地はありますが、村の青年が目をきらきらさせながら得意げに説明してくれたのが印象的でした。技術を押し付けるのではなく現地の人を育てている事に深い感慨を覚えました。清潔な水を、生きていくに必要な量確保できるということは、基本的なライフラインとしてとても大切なこと。そこに住む人たちが日本から知恵と少しのお金を得ることにより、よりよい未来への必要なものを作り出す。そしてその経験値がまた新しい財産となる。とてもよい事例だと思いました。また現地コンサルタントとして韓国の方が関わっておられ、長年のインドネシア暮らしで信頼を築きながら一緒にお仕事している姿も印象的でした。

4

栗原 朋子 都市部では経済発展が目覚ましく貧困率が改善しているが、地方には依然として貧困率が高い州があり、そのような地域において住民たちのニーズに基づき小規模なインフラ整備事業が行われている。県庁にて関係者と顔合わせ及びあいさつの後、灌漑施設と村落給水設備の2か所を見学。政府関係者（中央～県レベル）、コンサルタント、地域住民と関わる人間が多いものの、インフラ整備という目に見える形でプロジェクトが完成するため効果がわかりやすい。不公平感が出ないよう各村で自主的にプロジェクトを進め、自分たちで作りに上げていく。プライドとオーナーシップが生まれ、完成したものに愛着がわき大事に使い続けるのではないだろうか。灌漑施設の整備は、農産物の収穫量を増やし収入向上につながる。給水設備の完成は、衛生環境を向上させ、飲み水を汲みに行く仕事が無くなった子供たちに教育の機会を与える。効果が見えているものと、まだ見えていないものがあるそうだが、うまく行ったプロジェクトに関しては他地域にも展開されている。自分たちのプロジェクトが他地域にも展開されていることを知れば、誇りに思うだろう。

Republic of Indonesia

- 5 佐藤 康仁 南スラウエシ州ジェネポント県には貧困度の高い地域がある。ここでは、有償資金協力の貧困削減地方インフラ開発事業(II)が実施されている。県庁訪問後、コンサルタントのキムさん(インドネシア在住歴40年の韓国人)の案内で、灌漑施設と給水施設を視察し、インタビューを実施した。灌漑施設の対象地域では、以前は米のみの一毛作であったが、施設の完成後は、米、トウモロコシ、豆の三毛作が可能になったと喜びの声が聞けた。給水施設の対象地域においては、約700世帯に水を供給しており、これにより、子供や女性が水汲み仕事から解放され、子供は学校に通えるようになったとの話を聞いた。水道の普及により貧困を抜け出すきっかけを作りだしていることが感じられた。また、水道利用にあたっては、利用者が料金を支払う仕組みになっており、これにより、水道の維持管理が可能になっているとのことである。給水施設の提供だけでなく、水道の維持管理まで考慮されていることを聞き、安心できた。
- 6 須磨 麻寿美 地域住民が中心となり自分達が必要なインフラ設備を自分達の手で作る。土木作業がメインだが男性の意見だけで成り立つのではなく、コミュニティに一人は女性、もしくは女性グループを入れ計画段階から女性の声を反映させているそう。中には市場設営案件もあり、販売員として女性の雇用が確保できるケースもある。農業用灌漑水路を建設することで一毛作が三毛作になる、村落給水施設(ポンプで井戸水を汲み上げ重力排水で家庭に給水)では子どもが水汲みしなくてよくなり学校に通えるなど協力の意義が伝わりやすかった。また、工期も短く住民の興味が薄れないうちに完成させている点も成果の出やすさに繋がっていると感じた。
- 7 手塚 大二郎 「貧困削減地方インフラ開発事業」と名の付く通り、このプロジェクトで目指しているのは、「豊かさを増やすこと」というより「貧しさを減らすこと」にあると思う。貧困を削減する、ということはつまり、生きるために最も重要なものを確実に確保すること、とも言え、今回の視察先では、それはすなわち「水」であった。その「水」に関わる灌漑施設と給水設備を視察した。灌漑施設の整備によりもたらされた水によって、米の一毛作から米・とうもろこし・豆の三毛作が可能となった。給水設備の整備により、煮沸すれば飲める程度の上水を供給できるようになった。そして、なにも水は飲食だけに関わる訳ではない。水道は、遠くの井戸までの水汲み作業の負担を大幅に減らした。水汲みを担っていた子ども達には、教育を受ける時間がうまれた。水で体を洗うことで、衛生面が改善された。まさに、このプロジェクトによって生み出された「水」が、貧困を削減してくれているのである。
- 8 宮原 昌宏 支援される側の現地の人々が、自分たちの課題を探し、その解決策を支援する側の日本人と共に考え、自分たちの手で行動する仕組みがとても素晴らしいと思った。事業の一つである視察先では、簡易な灌漑用の水路を引くことで、米栽培だけだった農作地が豆ととうもろこしの三毛作が可能になり収入も増え、彼らにとっては大きな成果を得ることができている。インドネシアの自然の豊かさを実感したと同時に、その自然の豊かさが、必ず目を合わせて笑顔を見せてくれる彼らの寛容性の源だと感じた。現地の人々が主体性をもって、彼らのペースで発展していくことを尊重し、経済発展の裏側で失うものもあることを学んだ私たちが一緒になって歩いていくことで、インドネシアだけでなく世界の未来を描いていけるように思えた。